

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集  
第 37 集 (2005年度) 2006年 3 月発行：149—165

## カルチャー・ステレオタイプからの脱却 —日本語を教える大学教師のマイクロ・エスノグラフィー—

倉 地 暁 美



# カルチャー・ステレオタイプからの脱却

—日本語を教える大学教師のマイクロ・エスノグラフィー—

倉地 曉 美\*

## 問題の所在

留学生や日本人一般のカルチャー・ステレオタイプや自他の国家、民族に対するイメージに関する研究はこれまでもいくらかなされてきたし、教師が学習者に与える影響に関する研究に至っては枚挙に暇がない。しかし、教師が何を契機にして、あるいはどのようにステレオタイプを形成、変化させていくのかと言った教師のカルチャー・ステレオタイプに焦点化した研究は少なく、教師のステレオタイプの形成・変化とその背景要因との交絡を解明するには至っていない。教師の中でもとりわけ、外国人学習者にとって最も身近なインフォーマントとも言うべき日本語教師が、自らの、あるいはそれとは異なる国家、民族、文化集団に帰属する人々をどのように捉えるのか、教師の態度やものの見方が、外国人学習者の異文化理解に及ぼす影響は決して看過できるものではない。

倉地（2003）は、『留学生のカルチャー・ステレオタイプとその対処法に関する研究』において、在日外国人留学生の偏見、ステレオタイプに積極的に働きかけ、留学生の膠着化した静態的な異文化観に恒常的に揺さぶりをかける存在が異文化理解の深化・促進にいかん重要であることを明らかにした。ちなみに、これは倉地（1997）が異文化間教育学会編『留学生の日本語習得と文化理解』において深層面接から導き出した質的研究の結果とも呼応している。

吉野（1997）は、英語教師に限らず、日本語の教師も日本人論の伝播によって文化的差異をめぐる言説の再生産に加担していること、文化間の類似・共通性が無視され、ステレオタイプ化された文化的差異の言説が過度に繰り返し強調されていることを明らかにし、こうした異文化間コミュニケーション論の影響による「外国人にうまく意思疎通ができない時に文化を言い訳にしたり、微妙さを重視する日本的思考様式は外国人には分からないという考え方が、在日外国人の社会的適応を阻害している」（p. 255）と指摘しているが、吉野の指摘は日本語教師を対象にした実証的な研究成果に基づいたものではない。そこで、倉地（2003）は、国内で外国人学習者の日本語学習支援に携わる教師とボランティア教師の異文化に対するカルチャー・ステレオタイプ及びその対処法の実態把握を行うことの重要性に鑑みて、西日本の各地の大学、民間学校、ボランティア教室などで日本語教育に携わる教師、ボランティア123名を対象に質問紙調査を実施した。

その結果、教師という立場にあり、かつ日常的に多様な異文化と接触する機会が多いはずの、多くの日本語教師（ボランティア教師を含む）の回答において、カルチャー・ステレオタイプの表出がほとんど抑制されない傾向が析出され、吉野（前掲）の主張を裏付ける結果が得られた。異文化接触の最先端にいる多くの日本語教師が、特定の国家や民族集団に帰属する多様な人間特性を一元

\*広島大学大学院教育学研究科教授

的にパターン化する考え方や、静態的で紋切り型の文化観を当然のものと捉え、教室場面でステレオタイプを表出することの様々な影響や弊害を十分に認識しないならば、それは真に由々しき問題である。加えて、上記の質問紙調査の結果からは、若い大学生・大学院生の中に、カルチャー・ステレオタイプの危険性をしっかり認識し、その表出を抑制できるものが一人も存在しなかったことも明らかになった。このことは、カルチャー・ステレオタイプに拠る、単純で一元的な文化理解・人間理解の危険性を認識し、文化の多様性、可変性を認め、対話による異文化理解を推進できるような教師（倉地 1992）を育むために、大学・大学院などで教員養成に携わる立場にある者が、何をなすべきか早急に究明することの重要性を示唆している。

倉地（2003～2006）は、「外国人学習支援者のカルチャー・ステレオタイプと異文化間トランスに関する研究」（文部科学省助成科学研究）において、前の質問紙調査の対象者（91名）の中から、カルチャー・ステレオタイプ表出に対して自己抑制の働きが認められるステレオタイプ数の少ない教師7名を抽出し、彼らのライフ・ヒストリーを聴き取ることによって、複雑な背景要因のどのような絡みが教師のステレオタイプに対する気づきに影響を与えているか、彼らのステレオタイプは何を契機に変化したのか、マイクロ・エスノグラフィック・インタビューを実施した（倉地 2005）。その結果、以下の諸点が明らかになった。すなわち質問紙調査でカルチャー・ステレオタイプの表出の抑制が顕著に見られた7名の教師は：

- ①30歳以上、55歳未満の少なくとも3年以上の日本語教育・内外での国際交流経験をもった中都市、小都市、町村の出身者で、専任教員は1名のみであった。
- ②学部4年以上の教育を受けており、比較的高学歴であった。
- ③長女または長男で、礼儀作法など家庭の躾などは厳しい反面、未成年であった対象者が遠い都会の大学に進学することや、在学中あるいは卒業後に海外に出て行くことに対して前向きに賛同してくれるような進歩的な考えをもった親に養育されていた。父親は全員が勤め人で、内5名は父親が、1名は夫が教職関係の仕事に就いていた。
- ④異文化的状況での苦勞体験のあるものが5名いた。
- ⑤ステレオタイプ遞減の動機としてキーパーソンとの出会いを挙げたものが2名あった。そのうちの一人が、教育現場での外国人学習者の多様性の発見を理由に挙げた。
- ⑥「大学時代にステレオタイプの問題性を認識した」と回答したものは、大学、大学院で文化研究を専攻にした1名であった。
- ⑦いずれも、自己分析、内省、及びセルフ・モニタリングの能力に優れ、礼儀正しく、まじめで、時間などの約束事をきっちり守る人柄で、自己表現力に秀でており、知的好奇心が旺盛で向上心を持った人物であった。
- ⑧1年以上海外生活経験のあるものが6名あり、残る1名も国の派遣事業などで、何度も渡航経験を持っていた。
- ⑨外国人との交友関係として、心友・仲間がいるものが6名で、残りの1名も個人的な交流はないが、在日外国人を対象に少人数でのボランティア活動を約15年間続けていた。

すなわち、ステレオタイプ通減に寄与すると思われる要因として、(i) 従来から Allport (1954) によって論じられてきた接触仮説における (海外生活体験を初めとする) 異文化接触経験の量とその質 (①⑧⑨) の重要性に加えて、(ii) 家庭教育、とりわけ親の因習的ではない、外に開かれた養育態度 (③)<sup>1)</sup>、(iii) 学校での正規のカリキュラムではなく、いじめや海外でのマイノリティ体験からのインフォーマルな学び (④)、(iv) 生涯教育におけるキーパーソンとの出会い (⑤)、(v) 高等教育 (②)、(vi) 高等教育段階における批判的な文化研究の視点 (⑥) の導入、(vii) 内省、セルフ・モニタリング能力、対人コミュニケーション能力、知的好奇心が旺盛で、変化や違いを楽しむことができる柔軟性に富んだパーソナリティ特性 (⑦)、(viii) 一定の人生経験が挙げられる (①)。倉地 (2003, 2005) はインタビュー調査の分析結果から、これら諸要因の複雑な交絡によって対象者のステレオタイプに対する態度形成が行われるのではないかと結論づけている。しかし、そこからは、質問紙調査から抽出された7名の教師の全般的な傾向を概観することができるだけで、ステレオタイプの表出が見られない教師一人一人の個別のライフ・ヒストリーの中から、個々の対象者の多様な社会的・文化的背景要因とステレオタイプに対する態度形成・変容との関係性を浮き彫りにするには至らない。

## ケース・スタディの目的

そこで、本研究では、前の質問紙調査のすべての質問項目において、ステレオタイプの危険性・通減の必要性を認識し、かつステレオタイプ表出の自己抑制が顕著であった一人の教師の背景要因とカルチャー・ステレオタイプの形成・変容の関わりを明らかにし、カルチャー・ステレオタイプ通減の機序を解く手がかりを得ることを目的とする。かかる事例研究から導かれる研究成果は、外国人学習者への働きかけに戸惑い、カルチャー・ステレオタイプの対処において、試行錯誤を続けている現職の日本語教師や教員養成課程にあるボランティア学生のカルチャー・ステレオタイプ通減の方途を探る上で、有効なヒントを導き出せるものと考えられる。

## 方法

本稿では上記のインタビュー調査の対象となった7名の教師の中でも、特に対象者Aのデータを分析する。その根拠は、対象者Aが前の質問紙調査のカルチャー・ステレオタイプについて具体的な記述を行う質問項目において、カルチャー・ステレオタイプの表出が最も抑制されていた0回答の3名(3名はいずれも大学の非常勤講師で、Aは唯一の男性)の一人であり、その中でも、唯一人、カルチャー・ステレオタイプの危険性と、通減の必要性に対する認識を併せ持つ、質問紙に協力した対象者(91名)の中でも稀少な存在だからである。

ステレオタイプの少ない対象者のみを対象に、フォローアップとして実施した民族誌学的な面接調査の実施に際しては調査依頼書を含め、その後のメールや電話のやりとりにおいても、対象者に対して事前に、「質問紙調査においてステレオタイプに対する認識が高かったから」、あるいは「自

己抑制力があると認められたので、あなたをフォローアップの対象として抽出した」という理由は一切述べていない。なぜならば、質問紙調査の中で具体的なステレオタイプを記述しない回答者の中には、ステレオタイプがない者、意識的に抑制している者だけではなく、紋切り型が提示できるほどの知識も持ち得ない者が含まれることが想定されるし、何よりも、調査者側が、初めから対象者の態度や特性に対して予見を持つことによって、対象者の本音が出されにくくなると考えられたからである。尚、本人のプライバシーを遵守し、個人の特定を回避するために、ここではAのデモグラフィックスに若干の修正を加え、提示することとした。

## A のカルチャー・ステレオタイプとステレオタイプに対する見解

インタビューを開始するに際して、まず前の質問紙調査でカルチャー・ステレオタイプを表出しなかった対象者が、果たして実際にステレオタイプを持っているのか、いないのか、ステレオタイプに対してどのような見解を持っているのかを確かめることにした。

以下のロー・データにおける I はインタビューアである調査者自身であり、A は対象者である。インタビューは本人の許可を得て、すべて録音した。

I：日本語教師をしていて感じたことのあるカルチャー・ステレオタイプがあれば、具体的に教えて頂けませんか。

A：日本語教師として感じたステレオタイプはないですね。——日本語教師を通じて感じた部分と個人的に感じた部分は違うということです。実は外国人と接してショックを受けたというのは、C国でのショックが大きかったものですから、それから帰ってきて、例えば「インドネシアの人に会ってこう——」というのは、ほとんど何も感じないんです。

I：Aさんはステレオタイプについて、どのようなお考えをお持ちですか。

A：ステレオタイプは、努力の仕方によって、かえって強まる。具体的なイメージがあったんですが、例えば仲間内でB文化の研究をしている人の中に多いタイプがあるんですが、最初はC(国)なら、Cに行ったら最初拒否するんですけど、あるいは苦勞するんですけど、しばらくするとC大好きと、Cがすべてになる。「Cの悪口を言うやつは許さない」「B教(C国とB国の宗教)はこんな宗教で、理解しがたいけど、実際はこんなにすばらしい宗教で理解しなきゃいけない」とか言うのですけれども、努力した結果、よい面ばかり見るようになってしまった。カルチャー・ステレオタイプをなくする努力によって、逆のステレオタイプを持つと努力する人が多いような気がする。僕から見ると、「こんなD国をほめていいの」、書物などをみても「Dのこういう点が進んでいるから日本も従わなければいけない」というけれども、日本がD国のまねをしようと思うと、環境、権利の問題とかが出てくる。そういうところをすべて無視したり、「D国はすばらしい」と、いろいろ問題が多いところが見えなくなってしまう。というのは、ある努力の結果として社会面でのステレオタイプが作られてしまっているように見える。(それが)どんなところで、危険か、セットで言わせてもらおうと、まず個人の対人関係を作るに当たって危険

であると思うんですけど。この人はこういう人だからこういう関係を作っているんだ」というある文化の人との関係の築き方の基づき方で、個人の中にいろんな基準ができてしまう。日本社会の中でお互いによくやっついていこうとするところの基準、個人の中のバランスというんですか、「何人と接触するときにはこうする」、「どこどこ文化と接するときには、こうする」と2つ基準とか、3つ基準になるのが、よくないことなのではないか、それと「D国だったらなんでもいい」という人は、自分の所属する社会から反れていく、阻害されがちな危険性がでてくる。そういう意味で危険だと思うんですけどー。

確かに質問紙では、「日本語教師としてあなたが感じておられる・感じたことのあるカルチャー・ステレオタイプについて記述してください」と問うている。インタビューによる追跡調査を実施することによって、質問紙調査では表面化しなかった部分、すなわち、Aの場合、日本語教師として感じているカルチャー・ステレオタイプと、個人として感じているカルチャー・ステレオタイプとを区別して考えていて、日本語教師として感じたカルチャー・ステレオタイプはないが、個人としては、東京人はひ弱、中年女性は社会性がない、関西人は冗談好きの3つのカルチャー・ステレオタイプを保持していることがわかった。

Aが日本語教師として、カルチャー・ステレオタイプを感じない理由として、挙げているのは、「C国で体験したショック」である（この点については次節の「カルチャー・ステレオタイプの遁滅についての認識」と「大学進学から30代半ばまでの4度の異文化体験」の節で詳しく論じる）。また、カルチャー・ステレオタイプに関しても、Aは、異文化を理解しようという努力、とりわけ否定的なステレオタイプをなくそうという努力が逆に、ポジティブに傾斜した歪んだカルチャー・ステレオタイプ形成の原因に転化することを指摘し、ステレオタイプが対人関係に及ぼす危険性及び、異文化を偶像視することの反作用として、自文化から反れたり、阻害されたりする危険性にまで言及していることがわかる。

## カルチャー・ステレオタイプの遁滅についての認識

以下では、カルチャー・ステレオタイプ遁滅の必要性を認識しているAに対して、遁滅のために具体的に何をすればよいのかと尋ねている。

I：Aさんは、カルチャー・ステレオタイプを遁滅するためにはどうすればいいと思われませんか。

A：たくさん長期的に接するしかないかなと思うんですけどね。——それは、なんですかねえ。

I：たくさん長期的に接するだけで遁滅されるものでしょうか。

A：そうですね、たくさん長期接する事だけが解決法ではないですね。（私は）一つは、自身の経験から、ずるくなった。特にD国の人と接するとき、ずるく接することができるようになった

たような気がする。C国は結局最後まで、なぜみんな宗教、宗教というんだって言うので1年(が)終わってしまったのだけれども、B(国)にいる途中1年ぐらいいたときに、ふと、気がついたんですけど、それまでB教について知っていたつもりだったのですが、B教が見えてきた、彼らの宗教が見えてきたということが突然わかった。それから、ずるくなることを覚えた。それがわかったときに、それまでの会話ですね。B教徒の筋書きに合わせて話を作っていくと、土俵ができて、話が進んでいく。彼らの考え方に話を合わせて、考え方に似ているじゃないかとあわせていけるようになった。カルチャー・ステレオタイプを低減することなしに、付き合いだけがうまくなったのですかねえ。

(私の場合)カルチャー・ステレオタイプを持つてはいけないのではなくて、「日本人は何」といわれたときは、具体的な顔しかない。「留学生とは?」といわれた段階で、一人一人の顔しか出てこないんですよね。中国系留学生とか、南米系でも、アメリカ人もそうなんですけど、そうすると当然、まとめていえない。具体的な顔しか浮かばないか、もしくは、知らないかの二つなんですよ。

I:「何々人はこう」とマスで捉えないのはなぜですかねえ。

A:それは、一番最初のC国の経験が強いんじゃないかな。C国の人は、なんでみんなこうなんだ。(と思っていたら、)実はそうじゃなかった。土俵を作るまでの段階で。土俵ができると一人一人の顔が違うことが、わかったときに、僕のもっていたカルチャー・ステレオタイプが強かったものですから、「イメージとして持てないな」と、逆にマスコミ不信になって、「C国人はこうである」というのが、嘘っぱちだということがわかった、それ以降、マスコミに書いてあるような「B教徒は——」というの、「うそっぱちだ、うそつきめ」と思えるようになった(笑)。

ここでAはカルチャー・ステレオタイプ通減の手段として、たくさん長く異文化と接触することを初めに提案しながら、I(調査者)の「それだけで通減できるか」という問いに対して、「それだけでもない」と即座に答えている。1年間C国で辛い経験をする中でAの中に築き上げられていったC国人に対する強固なまでのカルチャー・ステレオタイプが、インフォーマントとの出会いやその後の忍耐強い理解への努力によって、大きく崩れ落ちたとき、何々人といわれても「一人一人の顔しか出てこなくなり」、「まとめてイメージとして捉えることはできなくなった」のだという。重要なことは、異文化に漫然と接触するだけではなく、異文化理解を成立させるための共通の土俵を探し出し、それを手がかりに、一度は強固に構築されたカルチャー・ステレオタイプを、粘り強い異文化理解への働きかけによって脱構築させていくプロセスであることをAの事例は示唆しているのである。むろん、そこでは前節でも述べられているように、ネガティブなカルチャー・ステレオタイプを、ポジティブに変えるだけでは、新たな危険性が生じるだけであることを視野に入れた働きかけが求められる。

それでは、このようなカルチャー・ステレオタイプとその通減についての深い認識は、Aのどのような背景要因から生まれたものなのであろうか。以下ではAの背景要因を示しつつ、両者の関連を探っていきたい。



## Aのプロフィール：デモグラフィックス

Aは30代後半の男性で、教育関係者である父と専業主婦の母の間に、2人兄妹の長男として、北陸地方の中規模都市であるX市で生まれ、高校卒業までずっとX市で養育された。A自身は「小さいときは引っ込み思案な子どもだった」という。しかし高校時代、男の子の間で、外国語の短波放送を聴くことが流行していたときに、彼は、ある外国語（B語）に憧れ、その言語を勉強するために、大都会のE市のE大学に進学することになった。

保守的な地方都市に長男として生まれ育ったAの進学について、Aの親はどのように考えたのだろうか。Aの父親はX地方出身者でX方言だけしかできなかったため、他の地方から来た同僚と言葉が通じないことがあり、「言葉に対するコンプレックスが強く、周りの人と意思疎通ができないと本人は思っていたらしく、『地元の大学には行くな、若いときに大都会に出て勉強して、帰ってこい』」と一人息子のAに忠告し続けたという。

「B語の響きがよかった。きれいな言葉だという印象がとても強かった。珍しいことがしてみたいという気持ちもありますし、北陸の田舎では（その勉強は）できないですし、それは、人があまりやっていないので勉強してみたい」と思った。Aは父親の言葉に励まされ、故郷から遠く離れた大都会E市で通算6年間居を構えることになる。そして、そのうちの1年はB語の修行のため、西アジアにあるC国のC大学に留学をする。その後、「言葉の関係で」仕事に就くために、B語を専門に勉強できる九州のF大学の修士課程に進学した。F大学の修士課程を終わってすぐ、今度はB語を公用語とするB国にある政府関係機関で2年間、国際協力の仕事に従事した。帰国後は、同じF大学の博士課程に進学し、すぐに同級生と結婚した。30代前半で博士課程の3年間を終わってからAは、九州のF市で非常勤講師をしていたが、子どもが生まれ、「なんとかここで親父として頑張らなければならない」と思っていたところに友達を通じて、「東アジアのD国の大学で2年ほど常勤講師が必要だ」という話が舞い込み、約3年間、D国で日本語を教えることになった。言葉は、「現地に行ってからある程度できるようになった」という。最初の半年間は単身赴任をしたが、二人日本語教師が必要だということになり、後から妻も渡航することになった。

D国から帰国してから調査時までの3年間、Aは西日本のいくつかの大学や民間学校で、非常勤講師として日本語やB語などを教えたり、教師養成コースでいくつかの授業を担当したりしている。調査時においてAは、小学生の子どもと幼稚園の子どもを持つ2児の父親であった。

将来は大学の常勤としてどこかに職を見つけたい、日本語は楽しい、（仕事は）日本語でも言語学でも、B語でも英語でもいいと思います。」と将来の希望についてAは語る。そして「外国で仕事をしたいとは思われませんか」という問いに対して「外国で仕事がしたい。やっぱり、西アジアの地域とそれであれば、アフリカにいきたい。理由は、楽しそうだから。見ていて、いろいろとこちらが知らないような新鮮なショックがあるような気がします。B語が使えるところは第1候補ですけど、それ以外でも。アフリカに住んで生活がしてみたいと思います」と強い海外志向性を示す。逆に北陸にUターンすることについて尋ねてみたところ、「父は『外へ出て、戻ってこい』とிட்டんですけどー（苦笑しながら）。親父は『田舎はいいだろう』といいますけど、僕は『よ

くない』といます。北陸に帰る予定はありません」ときっぱり言い切る。Aの係累に外国人はおらず、現在、授業以外でAが外国人と関わる機会はめったにないが、海外に心友はいる。

Aのプロフィールと、ステレオタイプ表出に関して自己抑制力の高さを示した他の6名の日本語教師のプロフィールを比較してみると、Aは、大都市以外の出身でありながら、遠隔地にある大都市の大学に進学している点、勤め人（教職関係者）の父親を持つ第1子である点で、他の6名の対象者と共通する。ただし、既に述べたようにAは、質問紙調査の対象者91名の中でステレオタイプの表出をしない唯一の男性回答者であり、ステレオタイプに関して自己抑制力の高い7名の中でも、最長の海外生活体験（6年）と、比較的長い5年以上の内外における日本語教育経験を持っており、長期に亘る多様な異文化接触がステレオタイプに対する認識形成の一つの要因になっていることが考えられる。

さらに、特筆すべき点は、Aの父親が、自身は保守的な地方の中規模都市で生まれ育ったにもかかわらず、引っ込み思案で、未成年だった一人息子のAをX市に囲い込もうとはせず、「都会に出て勉強して来い」と地元から離れ、広い世界に出て色々なものを見てくるよう、繰り返しアドバイスを続けた点である。親の養育態度のみが子どもの偏見・ステレオタイプへの態度を決定づけるとは考えにくい。しかし、6名のステレオタイプの表出が少ない対象者がすべて地方の中都市以下の出身者で、第1子や一人っ子であるにもかかわらず、大学進学時に親の理解を得て都会に出ていることからみても、親の外に開かれた養育態度が、対象者の18歳までの価値形成や進路決定に何某の影響を与えたであろうことは否めない。それに関連して、子どもを後継者として地元で囲い込む必然性がない点で、Aを含めたステレオタイプの少ない対象者全員の親が勤め人であることも、外に開かれた養育態度の形成に何らかの影響を及ぼしているものと考えられる。

## 大学進学から30代半ばまでの4度の異文化体験

北陸地方の中都市Xで生まれたAは、30代半ばまで、4度の異文化体験をしているという。1度目は、大学進学のためにX市からは遠く離れた大都会のE市に移り住んだときであり、2度目は西アジアのC国へ語学留学をしたとき、3度目はB国の政府機関で仕事をするためにB国に渡ったとき、そして4度目が東アジアのD国で日本語教師の職を求めて渡航したときの計4回である。

1度目の、初めてE市に行ったときの苦勞として、①最初父親に言われていて、自分は言葉ができないと思っていたので、Eの言葉に合わせよう、合わせようと気にしながら生活したこと、②突然一人暮らしを始めたこと、③ゼロから人間関係を作り直したという点で長く寂しい思いをしたことの3点をAは指摘する。しかし、「異文化と自らが認識する対象は？」という質問に、回答としてAが挙げたのは、「D国の社会と、自分がいた頃のC国、B国の社会」の3つであった。そしてC国とB国について、「どちらが大変だったですか」という質問に対しては、「C国」であったと答え、「C国では最初の3ヶ月ぐらいは、僕の言っていることはわかってもらえるが、向こうの言っていることがわからなくて、困りました。最初はそれがショックで、そのときは毎日、『後、何日で帰れるか』と数えて、お酒を飲んで暮らしたというか、これまで大学で3年半やってきたのは

何だったのかと大変辛かった」,「僕が授業に出て、B語科で座っていると、同じクラスの学生が話しかけてくるのですが、皆、会話のパターンが同じで、先ず土台を同じにしないと友達になれない人が多かったような気がします」と述べている。「B語科では、なぜB教徒にならないの、B教の信者になれということ以上に会話が進まなかった。(しかし,)他の学科に行ったら,(同じC国人でも)別の雰囲気を持った友達がいることがわかったし、彼らとは、別の形で会話が進んだ。「B語科で僕に話しかけてくる人は皆とても信心深く、なぜB教の信者じゃないのに、B語ができるのかショックだったのだと思う。僕にとってはそれがショックで、とてもそれは辛かった。それ以上のショックはそれ以降なかった」と回想する。

それに比べて、B国では、公用語である「言葉(B語)もある程度できたし」、「1年ぐらい立った時に自身の経験からずるく接することができるようになった」という。「ずるさ」の説明としてAは「相手の考え方や宗教が見えてきたら、こちらの考え方や宗教を説明する際に、相手の筋書きに適当に合わせて話を作っていくと、土俵ができて、話が進んでいく。彼らの考え方に話を合わせて、『(あなたたちの)考え方に似ているんじゃないか』と合わせていけるようになった。」ことを付け加えている。そして「(日本からB国に行くよりは,)大学院から政府の関係機関に行ったという方が、文化の違いが大変だった」とAは述べている。3つ目のD国では、AはD語の文字の読み方が軽くわかる程度で渡航したので、言葉がわからず、最初は辛かったという。幸いにして日本語のできる大学関係者が、通訳や事務的な手続きを手伝ってくれたので、その点は助かった。しかし、生活に関する細かいことをいちいち大学関係者に聞けず、「身ぶり手振りで自分でもおもしろがってやっていた。苦労はしたが、楽しかったです」という。このように幾度も多様な異文化体験を重ねながら、Aが自らをマイノリティとして認識したことは1度もない。それは、以下のやりとりに明確に現れている。

I：長期にわたってマイノリティ性を強く意識されることはありましたか。

A：あんまりないですね。C国に行ったときも、えっと、なかったですね。不思議ですね。そういう概念がわからなかったのかもしれない。「何で、みんなこうなんだ」と偉そうに見ていたので、自分の中で彼らをマイノリティに押し込めたのかもしれないですね。

初めに論じたようにステレオタイプの表出に対して自己抑止力を持っている7名の教師の内5名の対象者は、子ども時代に同級生による陰湿ないじめや仲間はずれなどの体験、海外での苦労体験などを持っている。Aは、マイノリティという自覚こそはなかったと言うが、C国で、クラスメートとの会話が最初の段階から全く進まず、大変居心地の悪い「とても辛い」体験をしている点においては、他の4名の対象者と共通する。

AがC国で自己のマイノリティ性を意識しなかったのはなぜだろうか。それは、B国においても、またC国のような、B語を母語として使用する周辺諸国においても、ほんの一握りのエリートだけにしか操れない正統なB語を彼がしっかり習得していたことが起因するのではないだろうか。B教徒でもない彼が正統なB語ができる。その自負が、C国に行って最初の頃、皆が正統なB語ができ

ず、B語のC方言のような言葉を使用しているがために、言葉通じなかったときも、また大学の同級生が「(Aは自分たち以上に) B語ができるのに、どうしてB教の信者ではないのか」と宗教問答しか繰り返さず、会話が進まない状況にあったときも、卑屈な気持ちにならずにいられたのではないだろうか。一方、B国では、「言葉の問題もなくなり」、しかも政府関係機関の職員という保障された身分で渡航していること、D国では生活上言葉の問題こそはあっても、大学教師という一定の社会的立場が保証されており、しかも日本語のネイティブとして学習者や現地の教師に対しては、絶対的なオーソリティの地位におかれることによって、自分自身ではなく「彼らをマイノリティに押し込める」ことになったのではないかと考えられる。とはいえ、AがC国、B国、D国において、程度の差こそあれ、違和感や、居心地の悪さや孤独、疎外感などの苦勞体験をしていることは以下の面接結果からも明らかである。

I：ところで、Aさんは価値観や言語行動の違う人とかにしんどさとか苛立ちを感じることはありますか。

A：あります。

I：どんなところにそれを感じ、感じた場合はどのような対処をされていますか？

A：——まずはえっと、どんなところに？えっと、まずは具体例しか挙がらないのですが、C国やB国やD国で暮らしたとき。どういう面で、何で自分がいらいらしているのかを考えて、自分が所属している社会とイライラの対象の社会のどういう面が違っているのかを考える。相手の文化のどういう部分が違っているのか、見極めようとして、見極めた結果、それに折り合いをつけようと努力する。それに折り合いがつけられるまで、いらいらしている自分を楽しもうとする。それを隠さないことも大切だと思います。

紙幅の都合上、ここでは、インタビュー調査で同時に行った異文化間トランスについての議論にまで言及することはできない<sup>2)</sup>。しかしカルチャー・ステレオタイプや異文化理解に対する態度のみに限って見ても、Aの海外での異文化体験が、そこに大きく寄与していることは否定できない。

## パーソナリティ要因

上記のインタビュー資料にも明らかのように、Aはとても饒舌で、自分自身をしっかり分析・内省する力、自分のことを臆せず表現できる対人コミュニケーション能力を備えているといえる。また、最初の留学で苦い経験をしたにもかかわらず、1年間C国で耐え続けた点、帰国直後にB文化圏で生活することの困難さを知りながら、あえて2年契約でB国に赴任し、新たな異文化体験に耐えたという点などから見て、Aが非常に忍耐強い性格であること、それぞれの地での困難な状況から脱却するための自己問題解決能力を備えていることが分かる。また、礼儀正しく、時間の約束をきっちり守るなど、対人行動における几帳面さはあるが、いわゆる融通の利かない型にはまった堅

苦しさはなく、むしろ変化や違い、多様性を楽しむ柔軟性に富んだパーソナリティであることが、30代の後半で2児の父親でありながらも、将来の抱負を聞くと「アフリカにいきたい。理由は、楽しそうだから。見ていて、いろいろとこちらが知らないような新鮮なショックがあるような気がします。」と述べている点や、「折り合いがつけられるまで、いらいらしている自分を楽しもうとする。」という前節の発言の中にも顕著に現れている。

## 考察

以上、インタビュー結果から、対象者Aの場合、本稿の初めに提示したステレオタイプの認識に関与すると思われる背景要因の①から⑨の内、生涯教育におけるキーパーソンの存在、高等教育における文化批判の視点獲得以外の7つの背景要因を備えていることが明らかになった。Aの場合、確かにキーパーソンの存在はなかったが、C国でカルチャー・ステレオタイプに凝り固まってしまったAに、文化のインフォーマントとして、Cの多様性を教えてくれた現地の人々の存在が、それに代わるものと考えられる。

様々な背景要因と思われるものの中で、インタビューの中で、Aによってひとときわ熱く、繰り返し語られたのは、C国、B国での体験である。しかし、Aの両親が長男で一人息子のAを手放さず、北陸の中都市に囲い込んでいたら、引っ込み思案のAが、専門的にB語を習得することもなかったであろうし、長期間CやBに滞在するということもなかったに違いない。さまざまな背景要因は決して独立して作用しているわけではなく、間接的、直接的に対象者のステレオタイプに対する態度変容に複雑に関わっている。パーソナリティ要因に関しても、例えば、Aの優れた対人コミュニケーション能力は生来的なものであったかもしれないが、「小さい頃は引っ込み思案だった」と述べられていることから、他の背景要因との関わりの中で、後天的に獲得された面もあると考えるべきであろう。

ところで対象者Aが最も強調する海外生活体験は、単なる物見遊山の海外旅行やホームステイなどとは異なる。それは長い孤独と苦難の中から自力で一条の光を見出すような大きな人生体験である。むしろAが苦難の中で挫折せず、ステレオタイプから脱却し、新しい異文化理解の観点を獲得できたのは、何よりも長期間、異文化的状況（倉地 1998）に向き合うために必要なトレランスと対人能力、高度なB語力、そして自分自身及び自己と異文化との関わりを厳しく冷静にみつめ、内省する力を持ち合わせていたからこそともいえる。ただし、A自身も述べているように、異文化に対する理解への努力は、皮肉にも異文化（あるいは自文化）一辺倒のステレオタイプに陥る危険性を常に孕んでいる。そこに陥らないためには、自分自身、及び異文化と自己との関わりを常に批判的な目で冷静に分析し、セルフ・モニタリングできる力と柔軟性に富んだ思考力を育成することが不可欠であろう。

質問紙調査の対象者の中で、ステレオタイプの抑制が一定できたわずか10%足らずの日本語教師が、押し並べて30代半ばから50代半ばまでの年齢層に該当し、一定の人生経験、学習経験、教師経験を持っていたということは、文化本質主義的な傾向が根強い日本語教育の風土の中で（倉地

2005), ステレオタイプに容易に偏らない, 冷静で批判的な思考力, 柔軟な思考力を, 自然獲得することは難しく, Aのケースでも顕著であったように長すぎず短すぎない適度の人生経験と, 多様な異文化経験を待たなければならないことを示唆している。教員養成課程でカルチャー・ステレオタイプからの脱却を目指す限り, 少なくとも高等教育段階では, 1年未満の短期の海外生活経験に多くを期待したり, 自然の成り行きに任せるのではなく, 計画的に, 思考の柔軟性や, 批判的な思考, トレランスや自己内省能力を育成することが必至である。加えて, 本研究の結果は, 恒常的に日常生活の場面で, 自他文化に対する偏見・ステレオタイプな見方の問題性に, 気づかせてくれるような文化のインフォーマント (ないしはキーパーソン) の存在が不可欠であることを示唆していると言えよう。

## 【注】

- 1) Adorno ら (1950) による古典的な研究で, 親の権威主義的な態度と偏見の関連性を明らかにしたものがある。親の厳しく権威主義的な態度によって, 子どものものの見方に柔軟性がなくなり, 世界を単純な視点で捉えがちになるという。
- 2) トレランスに関しては倉地 (2006) 『外国人学習支援者のカルチャー・ステレオタイプと異文化間トレランスに関する研究』平成15~17年度科学研究費補助金研究成果報告書研究代表者倉地暁美を参照されたい。

## 【参考文献】

- Adorno, T., Frenkel-Grunswick, E., Levinson, D., & Stanford, R. 1950, *The Authoritarian Personality*. New York: Harper.
- Allport, G. 1954, *The Nature of Prejudice*. Reading, M.A.: Addison-Wesley
- 倉地暁美編 近刊『多文化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク
- 倉地暁美 2005 「日本語教師とボランティアのカルチャー・ステレオタイプに関する調査研究: 質問紙とインタビュー調査の分析結果から」『広島平和科学』27, pp. 117-135
- 倉地暁美 2004 「カルチャー・ステレオタイプの危険性・通減の必要性を認識しない教師とボランティアに関する分析」『日本語教育学科紀要』広島大学大学院教育学研究科 Vol. 14, pp. 9-15
- 倉地暁美 2004 「カルチャー・ステレオタイプの問題性を認識している教師と認識していない教師に関する比較考察」『広島大学大学院教育学研究科リサーチ・オフィス共同研究プロジェクト報告書』, Vol. 2, pp. 182-195
- 倉地暁美 2003 「ボランティアと日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ: 認識と自己抑制に関する研究」『広島平和科学』25, pp. 81-108
- 倉地暁美 2003 「留学生のカルチャー・ステレオタイプとその対処法に関する研究」平成13-14年度科学研究費補助金研究成果報告書 (研究代表者: 倉地暁美)

倉地曉美 1998『多文化共生の教育』勁草書房

倉地曉美 1997『深層面接 (in-depth probe) による留学生の異文化理解と言語習得に関する分析』  
異文化間教育学会編『日本語習得と文化の理解』pp. 216-299

倉地曉美 1992『対話からの異文化理解』勁草書房

吉野耕作 1997『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学  
出版会

# Freedom from Cultural Stereotypes: a Micro-ethnography of a University Teacher of Japanese as a Second Language

Akemi KURACHI\*

Although teachers' images and cultural stereotypes are likely to influence the way their overseas students construct a view of their cultures, little research on the cultural stereotypes of teachers has been conducted in Japan. Prior to this study, the author conducted a survey by questionnaire of teachers, combined with follow-up interviews of 7 subjects who showed a high degree of awareness and self-control of their own cultural stereotypes (Kurachi 2003, 2004, 2005). The results of this prior study indicated that nine factors are significantly related to subjects' awareness and self-control of their stereotypes.

The purpose of the present study is to build on this prior research by: (1) depicting the background and life-history of a university teacher who showed the highest level of awareness and control of his own cultural stereotypes and; (2) investigating how his case differs from those of the other 6 subjects.

The subject of this case study is a male part-time teacher in his late 30's who has finished a doctoral course and has lived in foreign countries for more than five years. The interviews revealed the following characteristic and his life-experience that appear to have contributed to his self-awareness and self-control: (1) a high quality and quantity of intercultural contacts, (2) higher education, (3) open-minded attitudes toward child-rearing on the part of his parents, (4) relatively broad life experiences, (5) experiences of difficulty in other cultures, (6) personal traits such as reflexivity, critical and flexible thinking, appreciation of change and diversity, intercultural tolerance, and a positive attitude, (7) good interpersonal communication skills, (8) presence of decent cultural informants when he was abroad.

Among these factors, both his experiences of meeting several groups of informants who helped him develop a wider and relative perspective toward other cultures, and his personal traits, especially self-monitoring, tolerance, reflexivity, critical and flexible thinking, seem to be most important in helping him avoid falling into excessive partiality towards his own or other cultures.

The 8 factors found in this subject were, more or less, found in the 6 other subjects who showed toleration and self-control. However experiences in other cultures were very much emphasized in the initial male teacher's interview. Furthermore the interesting finding was that all 7 subjects' images of cultural groups and their processes of gaining awareness of cultural stereotypes were varied/different, one from another, the experiences of the male subject being especially unique. While many other subjects responded that (1) they knew how awful it is to stereotype people based on their own painful experiences in the past, or (2) they

---

\* Professor, Graduate School of Education, Hiroshima University



learned about the diversity of people quite naturally through teaching overseas students from different cultural backgrounds, he explained that he learned from the shock. In his case the shock was not due to his own experiences of being treated in a biased or stereotypical way by others, but to realizing that his own prior cultural stereotypes toward a host culture were not appropriate, something that he came to recognize from interacting with a number of cultural informants. While many other subjects indicated their intention to refrain from using cultural stereotypes, he mentioned that he does not intentionally control his use of cultural stereotypes, but when asked to say something about any other cultural group, he imagines a number of individual faces.

This subject's behavior contrasted with the results of the prior questionnaire survey in which none of the Japanese graduates or undergraduates who majored in Japanese as a Second Language were aware of their cultural stereotypes or could refrain from exhibiting their cultural stereotypes in response to the questionnaire. This suggests that such students may be affected by a climate of cultural essentialism in the field of Japanese as a Second Language.

It is concluded that if one intends to release Japanese teachers from their cultural stereotypes, personal traits such as reflexivity, tolerance, critical and flexible thinking must be deliberately developed, at least at the college teacher training level.

